

上越教育大学「いじめ等予防対策支援プロジェクト（BP プロジェクト）」の公開授業を参観しました。

6月22日（木）、上越教育大学のいじめ等予防対策支援プロジェクト（BP プロジェクト）としての高橋知己准教授の授業を参観しました。これは、鳴門教育大学、宮城教育大学、福岡教育大学の「教員養成大学におけるいじめ授業の在り方を考える-授業参観と研究協議会-」の一環でもあります。

授業は、約250名の学部2年生、大学院生を対象に、「いじめ防止について考える-発見編-」をテーマとしたものでした。

まず、高橋准教授は、近年の3つのいじめ事案を概観し、いじめ防止は、学校・社会における喫緊の課題であるにもかかわらず、頻発するいじめ事件を防げないのか、対処できないのかと学生に問いかけ、「いじめを発見するには？」「どのような指導が効果的なのだろうか？」「学校の対応は？」の3つの点から考察し、対応を検討することを提案しました。本日は、この3点のうち「いじめを発見するには？」に焦点をあて、約6名のグループに分かれ、グループワークを行いました。

グループワークのテーマは、「いじめを発見しにくいのはなぜ？」「いじめはどうしたら発見できる？」でした。参加者は高校卒業後1年程度の学生が多く、いじめを身近な問題と感じており、また、将来教職に就くことを目指していることから、グループワークが活発に行われ、熱気あふれるものとなりました。

授業の途中、県内のどこの学校でもいじめ発見のために行われているアンケート調査について、次の非常に興味深いやりとりがありました。

「たとえば、いじめられていても、いじめのアンケート調査には書かない」という意見に対して、高橋准教授が「なぜ書かないの？」と問いかけると、「面倒くさいことには巻き込まれたくない」「いじめられていると認めたくない」「所詮アンケートに書いても誰も見てくれない」などの意見がありました。

このことを受け、高橋准教授は、学生たちに「では、いじめを発見するために、あなたが教師なら、どうする？」と問いかけ、再び、学生たちはいじめを発見する方法について活発な議論を行いました。

最後に、いじめを発見する方法についてのまとめとして、学生たちの意見が多かったのは、「(児童生徒の) 怪しいことにはすぐ反応すること」「SOSのチャンネルを複数用意すること」「アンケートを工夫すること」などでした。

小学校から高等学校まで、いじめ問題を考えるとき、今日のような、「主体的・対話的で、深い学び」が、有効な取組の一つであるとの印象を持ちました。

